令和三年度　弘学館入学試験

中学校　国語問題

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

彼はネズミ色の服を着ていた。

こう書くと、誰もが同じような色を想像する。実際には白いネズミや黒いネズミもいるのだが、色としてはグレーを考えるのがふつうだ。ネコ色という言葉がもしあったとしても、ひとつの色がみんなの頭に浮かぶとは思えない。明るい色、暗い色、いろいろな茶色も含まれるだろう。ネズミ色のほうは、ほとんど無彩色である。明度の違いだけで彩りのない色、灰色の世界である。

色の好みは人それぞれだが、色の感じ方には共通するものがある。暖色や寒色という言葉があるように、色に温度を結びつけたり、ある感情を与える作用を認めたりする。どの文化でもたいがい赤は注意や警戒感を与えるし、青はその反対に沈静をもたらす。ふたつの色を混合して得られる紫は、日本でもヨーロッパでも昔は高貴な色として、特別な階級の人々の服装に使われた。『源氏物語』が別名「紫の物語」と呼ばれたように、色が物語を象徴することさえある。

その点、ネズミ色はあまりいい意味をもたされていない。なにしろ世界中どこでも害獣と見なされているネズミの色なのだし、これを灰色と言い換えても、否定的な意味に結びつく。ネズミ色の服を着た人が、煤けたような壁に囲まれて、灰色の茶碗を手にしているとしたら、ずいぶん地味で面白みのない世界を想像するのがふつうだろう。①「灰色の世界」と聞けば、明るく楽しい世界の反対がイメージされるし、「グレーゾーン」と言えば、曖昧でどっちつかずと怪しまれる。

だが身のまわりに目を向けると、②わたしたちが生きる世界には意外に灰色が多い。舗装された道路、コンクリートの建物、さまざまな配管、電柱に電線……都市生活をとりまく環境の大部分はこの色で占められている。公共空間だけでなく、オフィスや自宅でも多くの製品にグレーが使われる。特別な意味をもたず、特別な感情にも結びつく必要がない場所では、グレーのほうがよい。

もし都市環境のあらゆる場所に鮮やかな色がつけられていたら、わたしたちの感覚はマヒしてしまうだろう。また室内の灰色の部分を、すべて違う色に塗り替えたら、混乱と疲労で仕事も勉強も手がつかなくなってしまうのではないだろうか。感覚と感情の安定を支えているのは、実は目立たない灰色のほうなのだ。

つまり灰色は消極的だから役立っているわけだが、人間は灰色をさらに評価することもできる。そのひとつが白黒写真である。白黒写真は言うまでもなく、世界から彩度を差し引いて、明度だけで表現する。さまざまなグレーの段階だけで表現するのだから、正確に言えば、白黒ではなく、灰色写真である。だからモノクロームつまり「単色写真」とも呼ばれる。面白いことに人間は、彩りのないさまざまな明るさの灰色だけで表現された風景を見て、それを美しいと感じることができる。それにはいろいろな理由が考えられる。

そのひとつは色を差し引くせいで、わたしたちが光と影に敏感になることだろう。たとえば新緑の木々から色を差し引いたとたんに、木の葉の重なりの微妙な影に気がつく。初夏の海をモノクロームにすると、砂と波がa才りなすパターンが見えてくる。

人間の顔もそうである。モノクロームで表現された人間の顔には、肌色とはまた違った趣がある。引き締まった画面の陰影が、人柄の深さを表すこともあるし、人生の時間を感じさせることもある。このように、わたしたちは灰色の無限の段階のなかに、光と影の戯れを見て楽しむことができる。

こうした感覚は実は昔から存在していたものだろう。都市のなかでいえば、日本や韓国の屋根瓦がそうだ。グレー一色の世界に見えるが、実はそうではない。同じグレーでも濃淡があるし、また天気によっても色が違って見える。山村の瓦と、漁村の瓦が違って見えるのは、環境だけでなく生活のせいもあるだろう。雲の色を反映して、夏の盛りには強く照り、雨が降ればしっとりと落ち着く。世界の建築のなかでも、これほど豊かな灰色をもった屋根はあまり見当たらない。

おそらく日本は灰色の美しさに目覚め、それを大切に育ててきた文化をもっている。伝統色と呼ばれる色名の体系を調べてみると、近代以前の日本には、特に灰色系に驚くほど多くの色名があったことがわかる。灰色も灰だけではないのだ。煤にも種類があるし、墨にもいろんな墨がある。派手な色彩を控え、微妙な明暗の変化を愛でる。そのもっとも洗練された芸術のひとつが、茶の湯にちがいない。

わたしが好きな色のひとつに、その名が残されている。それは茶の芸術が完成された時代の名残りとも、また③灰色の美学を表しているとも思える。利休鼠というネズミ色である。千利休の名と鼠の組み合わせがいい。ネズミ色の服を着た人が、竹煤色の小さな部屋で、灰色の茶碗を見つめている。日本の文化はそんな世界に、どんなカラフルな色にもまさる、最高の美を認めることもできるのである。

A　※1デジタルイメージが生活のなかに溢れるようになって、こうした感覚は大きく変わりつつある。たとえば映画の特殊撮影やゲームソフトといった※2フィクションのなかで使われてきたような※3ファンタジックな色、あるいは広告写真で使われているような、唇や肌の色をbキワダたせたり、反対にソフトにしたりする色彩効果は、コンパクトカメラに

さえ。ソウビされている。その特殊効果を、もはや誰も特殊とは思わないだろう。

ある意味で、こうした人工物の世界の色は、もともと人間が作ってきたモノの※4属性としての色だから、どんな色が何に使われようとも、本質的な変化はないとも言える。デジタルイメージによって引き起こされている色彩の変化は、むしろ「自然の色」の世界において顕著なのだ。

[B] 電子顕微鏡による※5バクテリアや細胞の写真。あるいは人工衛星による地表の写真。これらの写真で使われている色は、自然の色だろうか。そうではないだろう。大腸菌やエイズウイルスが紫やオレンジで表示されていたり、熱帯雨林の破壊を示す衛星写真では、残された森が赤に、そのなかを通る道が緑になっている。

これらの「写真」はいずれも情報処理を経たイメージであり、その^{d}カテイで※6グラフィック表示上の都合によって、ある特定の色彩を与えられている。わたしたちが慣れ親しんでいるカラー写真の「自然の色」とは、意味合いがまったく違う。地図に使われる色と似たような意味で、それらは※7便宜的な色であり、そのことが了解されているからこそ、ウイルスが紫で、密林が赤であっても、誰も文句は言わないわけだ。

したがって科学における「自然の色」とはe$^{}$フクザツな問題である。グラフィックの対象となる「自然」は、固有の色をもたないとも言えるからである。たとえば地球の気候の※8シミュレーションや大陸プレートの動きのグラフィックでは、※9固有の色の再現や表示が、そのイメージが伝えようとする現象にとって、本質的だとは見なされていない場合が多い。

④自然における色彩の変化とは、この点で、自然科学の方法論から必然的に生まれてきたものであるとも言える。

（港千尋『芸術回帰論』）

※1　デジタルイメージ――ここではデジタル技術を用いた映像。　※2　フィクション――作りごと。作り話。
※3　ファンタジック――空想的。　※4　属性――そのものがもっている性質。　※5　バクテリア――細菌。
※6　グラフィック――写真や絵。　※7　便宜的――そのときのつごうできめるようす。
※8　シミュレーション――モデル実験。　※9　固有――もともともっていること。

問1　波線部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。ただし、楷書で大きくていねいに書くこと。

問2　傍線部①「灰色の世界」とあるが、ここで言う「灰色」の説明として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　とくに目立たないが奥深い面白みを感じさせる色。
イ　日本では害獣とみなされているネズミに特有な色。
ウ　感覚をマヒさせて人に否定的な感情を抱かせる色。
エ　明度の違いがあるだけでほぼ彩りのない地味な色。

問3　傍線部②「わたしたちが生きる世界には意外に灰色が多い」とあるが、なぜか。六十字以内で説明しなさい。

問4　傍線部③「灰色の美学」とあるが、どのような「美学」か。解答欄の形に合うように二十字程度で抜き出し、はじめと終わりの五字を答えなさい（なお文末の句点は字数に含まない）。

問5　本文中の[A]・[B]にあてはまる言葉として最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　たとえば　　イ　だから　　ウ　つまり　　エ　あるいは　　オ　だが

問6　傍線部④「自然における色彩の変化とは、この点で、自然科学の方法論から必然的に生まれてきたものであるとも言える」とあるが、これに関する先生と生徒の対話を読んで、後の問い(一)、(二)に答えなさい。

生徒――大腸菌やエイズウイルスが紫やオレンジなのは、考えてみるとおもしろいですね。
先生――紫やオレンジは、多くの人間の視覚にとって、大腸菌やエイズウイルスのありのままの色と思いますか。
生徒――いいえ。本文中に「表示されていたり」とあることからも、違うように思います。
先生――そうですね。科学的に分析された結果をもとにイメージされた内容をデジタル技術を使って伝達するための紫であり、オレンジでもあるのです。
生徒――本文中の「情報処理を経たイメージ」のことですね。
先生――そうです。科学的に分析された結果を印象的かつ正確に伝えるためには、「特別な意味」をもたせる色である必要があるのです。
生徒――あ、そうか。だからたとえそれが自然固有の色とまったくかけ離れたものであっても、自然科学の恩恵を受けて暮らす私たちにはそのことに対する違和感がないんですね。
先生――「デジタルイメージ」による伝達が主流の現代、発信者が伝えたい内容をわかりやすく伝達することが可能になったのです。
生徒――そう考えると、傍線部④の「この点」の具体的な内容は、（　X　）ですね。速く正確に伝えることを重視すると、曖昧さや意味の微妙な揺れがあったりするとよくないですよね。でも一方で、よくないといって切り捨てたものの中に価値のあるものはないのですか。

先生――私たちの生活は、デジタル技術に代表される科学の発展によって確かに便利で快適になりましたね。しかし、本文中には「近代以前の日本には、特に灰色系に驚くほど多くの色名があった」とあります。（　Y　）が、効率を追求する近代合理主義によってなくなっていく感じがしますね。

(一) 対話中の（　X　）にあてはまる内容として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　自然固有の色を再現するより、伝達に最も適した色を使うことに価値を置くということ
イ　自然固有の色を、デジタル技術を活用していっそう美しく印象的に伝達するということ
ウ　自然固有の色による明度の美しさより、彩度のもつ明快な伝達力を重視するということ
エ　自然固有の色のもつ意味を見る者がよりはやく理解しやすいように変更するということ

(二) 対話中の（　Y　）にあてはまる内容として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　ありのままの色彩を伝える文化　　イ　色のもつ豊かさを重視する文化
ウ　渋い色調のもつ美を極める文化　　エ　伝達に不向きな色を許容する文化

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

大学合格を期に、一人暮らしをするための部屋を探しに来た母と私は、物価の高い東京で想定している家賃では思うように物件を探すことができず、結局古びて狭い木造アパートに住むことを決める。

「ねえ、桜の木があるわよ」

母は明るい声で言い、手招きをする。母の隣に立って外を見る。たしかに、隣家の庭に桜らしき木が生えている。隣の庭はずいぶん広い。井戸があり、物干しがある。庭に面した縁側に座布団が干してある。なんだか私たちの家に似ていた。

「ここでお花見ができるわよ。まだつぼみだけど、学校はじまるころには満開よ」

なぐさめるような口調で母が言い、なんだかよりいっそう気持ちが沈み、さっきから感じている苛立ちが倍増する。

電器屋と引っ越し屋は続けてやってきた。電器屋はちいさな冷蔵庫を台所に、洗濯機を玄関のわきに設置し、小型テレビを部屋に運びこんで去り、段ボール五箱とカラーボックスひとつを部屋の隅に並べて引っ越し屋は去った。あっという間だった。

「①片付け、ひとりでできそうだから、もう帰っていいよ」

私は言った。母はしばらく無言で部屋を眺めまわしていたが、

「ねえ、引っ越し蕎麦食べにいこうか」と言う。「蕎麦屋なんかあるかな」つぶやくと、

「蕎麦屋なんてどこにだってあるわよ、ここだって日本なんだもの」なんだかとんちんかんなことを言い、母は申し訳程度の玄関で靴を履いている。私もいっしょに部屋を出て、②おもちゃみたいな鍵を鍵穴にさしこんだ。

駅へと続く道が商店街になっている。ちいさな町とはいえ、さすが東京である。私たちの町の商店街とは桁違いにぎわっている。惣菜屋、スニーカー屋、レンタルビデオ屋、ゲーム屋、洋服屋、レストラン、喫茶店、雑貨屋。母はきょろきょろと目を走らせている。ときどき立ち止まり、私のコートの袖口を引っぱる。「ねえ、あのセーター特売よ、五千円しないなんて、嘘みたい」「なんだか洒落た喫茶店よねえ。さすが東京って感じ」「あのラーメン屋さん、雑誌の切り抜き貼ってあるけど、雑誌に載るような有名店なのかしら」「ここ、いいじゃない、二十四時間営業のコンビニ。夜にお醤油やお味噌切れても買い足せるし」華やいだ声を出す。

母の言うせりふはすべて私を苛つかせた。あんなところにこれからたったひとりで住むなんて、かわいそう。そんなふうに同情されている気分になった。本当に自分が気の毒な娘であるような気分になった。

「やめてよ、田舎者まるだしみたいでかっこわるい」

だから私は投げ捨てるように言い、袖口をつかむ母をふりきるようにして商店街をずんずん歩いた。こんな商店街のセーターなんか褒めないでよね。十一時に閉店するコンビニなんてうちのほうにしかないんだよ。雑誌の切り抜き貼ってるからっておいしい店とはかぎらないんだから。心のなかで悪態をつき続けた。

駅近くにあった蕎麦屋で、母と向き合って天ぷら蕎麦を食べた。びっくりするくらいまずかった。うちの近所の村田庵だってもっとましな蕎麦を出す。なのに母ときたら、おいしい、おいしいと連発する。「やっぱり東京の店は違うわね」なんて言う。私はむっつりとして、半分残して箸を置いた。もったいないと言い、私の残したぶんまで食べる母に、苛立ちを通り越して嫌悪まで覚えはじめる。

蕎麦屋を出る。春特有のふわふわした陽射しが商店街を染め抜いている。

③「じゃあここで、もう帰っていいよ、おかあさん」私はぶっきらぼうに言った。

「でも、まだ荷ほどきもしてないじゃない」

「あれっぽっちの荷物、私ひとりだって、すぐ片づいちゃう」

「掃除も、もう一回したほうがいいんじゃない」
「さっきしたばかりじゃないの」
「だけど、台所はなんだか汚れが落ちなかったし」
店先で言い合う母子を、通りすがりの人がちらりと眺めていく。
「もういいって」強い口調で私は言った。本当のことを言うと、母といっしょにあのしょぼけたアパートに帰りたかった。何度でもいっしょに掃除をしてもらいたかった。あの狭苦しい台所で、夕食のア支度をしてほしかった。魚の煮つけ、切り干し大根、たらこと葱の入った卵焼き、家のテーブルに並ぶような夕食。そして、布団を並べていっしょに眠ってほしかった。苛立った私の八つ当たりを、とんちんかんな言葉で受け流してほしかった。けれど今日泊まってもらったら、明日も泊まってもらいたくなる。私は今日から、たった今から、ひとりで、あの部屋で、なんとか日々を過ごしていかなくてはならないのだ。
「もういいって。帰って」私は言った。泣きそうな自分の声が耳に届く。
「あっ、いやだ、おかあさん、忘れてた」
突然母が素っ頓狂な声で叫ぶ。
「何、忘れもの？」
「そうじゃないの、あのね、鍋。鍋を用意してあげるのを忘れてた」
母は言い、すたすたと商店街を歩き出す。コートを着た母のうしろ姿が、陽をあびてちかちかと光る。私はちいさな子どものように、母のあとを追う。
「鍋なんかいいよ」
「よくないわよ、鍋がなきゃなんにもできないじゃないの。あんたもね、料理くらい覚えなさい。フライパンひとつでできるものなんか料理とは言わないの、きちんと鍋を揃えて、煮炊きをしなさいよ」
母は得意げに言いながら、店先に茶碗を並べた雑貨屋に入っていく。店のなかは、食器や鍋や、ゴミ箱や掃除用品、ありとあらゆるものが所狭しと並んでいた。母は通路にしゃがみこみ、片っ端から鍋を手に取っていく。「これはなんだか重いわね」「これじゃあいかにも安っぽい」「こんなに馬鹿でかくても困るしね」ひとりごとをつぶやきながら、鍋をひっくり返したり片手で揺すってみたりしている。私は母のわきに突っ立って、隅に整然と並んでいるル・クルーゼの鍋を見ていた。高校生のころ、女性誌で見て、ひとり暮らしをしたら買いたいと決めていたル・クルーゼである。色も橙色と決めていた。けれど、これがほしいと母にはなんだか言えなかった。こんなもので料理なんかできませんと母は言うような気がした。実際、母の作るもの、母の作ってきたものは、ル・クルーゼとは不釣り合いだった。④あのアパートに橙のル・クルーゼがあっても、なんだか滑稽だとも思った。
「これがいいわ」
思いきり立ち上がった母ははずみでよろけ、体を支えようと咄嗟に棚に手をつき、積んであった鍋がものすごい音を出して転がり落ちる。店内にいた客が陳列棚から首だけ出してこちらを見ている。
「やだ、もう」顔がイ火照るのを感じながら私はつぶやく。
「やだもうはこっちのせりふよ」母も赤い顔をして、転げ落ちた鍋を懸命に元に戻している。「大丈夫ですかあ」店員が歩いてくる。
「あらまあ、ごめんなさいね、あのね、この子、春からこの先のアパートでひとり暮らしをするの、それで鍋と思ってね、選びにきたんだけど、やだ、こんなにしちゃって。大丈夫かしら、傷なんかついてない？　えーと、私が選んだのはどれだったかしら、しょうがないわねえ」
おばさんらしい饒舌さで母はべらべらとしゃべり、さっき選んだ鍋を店員に押しつけるように渡している。鍋は大、中、小と三つあった。
「三つもいらないんじゃない」
「いるわよ、ちいさい鍋で毎朝お味噌汁を作りなさい、大きい鍋は筑前煮とか、あとお魚を煮るときにね。中くらいのは南瓜とか里芋とか、そういうちょっとしたものを煮るのに便利だから」まだ顔の赤い母は念押しするように説明しながら、バッグから財布を取り出している。
「この子ね、はじめてひとり暮らしするんですよ。ご近所だし、何かあったらよろしくお願いいたしますね」
母は若い店員に向かって頭を下げ、鍋を包んでいた店員は困ったように私を見、かすかにウ会釈した。
母とは店の前で別れた。アパートにいって荷ほどきをすると母は言い張ったが、ひとりで大丈夫だと私はくりかえした。
「そうね。これからひとりでやっていかなきゃならないんだもんね」
母は自分に言い聞かせるようにつぶやいて、幾度か小刻みにうなずくと、顔のあたりに片手をあげて、くるりと背を向けた。ふりかえらず、よそ見をすることなく、陽のあたる商店街を歩いていく。母に渡された重たい紙袋を提げ、遠ざかる母のうしろ姿を私はずいぶん長いあいだ眺めていた。母のうしろ姿はあいかわらず陽にさらされてちかちかと光っている。カートを引いて歩く老婆、小走りに駅へ向かうスーツ姿の男、幼い子どもの手を引く若い母親、いつもと変わらぬ町を歩く人

々の合間を、母はまっすぐ歩いていく。雲のない空の下で商店街はふわふわと明るい。この光景を、ひょっとしたら私は一生忘れないかもしれない、ふいにそんなことを思った。そんなことを思ったら急に泣き出しそうになった。ひとりになって泣くなんて子どもみたい。⑤私は母が向かう先とは反対に走り出す。かんかんと音をさせてアパートの階段を駆け上がり、紙袋の中身を取り出した。いつのまに母が頼んだのか、それとも店員が気をきかせたのか、大中小、三つの鍋はプレゼント用に包装されていた。でこぼこの包装紙のてっぺんに、ごていねいにリボンまでついている。みず色のリボン。ひとりきりになったちいさな部屋のなか、思わず私は笑ってしまう。

（角田光代「鍋セット」）

問１　波線部ア～ウの漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問２　二重傍線部「素っ頓狂な」の意味として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　おおげさな　　イ　調子はずれな　　ウ　悲しげな　　エ　きまり悪そうな

問３　傍線部①「片付け、ひとりでできそうだから、もう帰っていいよ」とあるが、ここでの「私」はどのような心情を抱いているのか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　大学に合格した喜びを実感する間もなく、東京での一人暮らしの厳しさを家賃の高さを強調することで私に分からせようとする母の言葉にいらだっている。

イ　大学に合格して喜ぶ私の気持ちとはうらはらに、物価の高い東京と比較して故郷の町の住みやすさをことさらに強調しようとする母の言葉にいらだっている。

ウ　大学に合格した時の嬉しさから一転、物価の高い東京での一人暮らしの生活の現実を突きつけられて落ち込む私の気持ちに追い打ちをかけるような母の言葉にいらだっている。

エ　大学に合格して嬉しい反面、東京の物価の高さも知らず豪華な部屋に住むことができると考えていた私の落胆をよそに、家賃の高さに無邪気に驚くような母の言葉にいらだっている。

問４　傍線部②「おもちゃみたいな鍵」とあるが、この表現が与える印象の説明として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　これから私の住むアパートの貧弱さ　　イ　これから私の住むアパートの面白み

ウ　上京したばかりの私の不安　　エ　上京したばかりの私の現実感のなさ

問５　傍線部③『じゃあここで、もう帰っていいよ、おかあさん』私はぶっきらぼうに言った」とあるが、ここでの「私」の本心の説明として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　田舎者まるだしの振る舞いを続ける母に恥ずかしさを覚え、一緒にいることで自分までもが同様に見られてしまうことを恐れ、そうなる前に早く母と別れてしまおうと思っている。

イ　東京の商店街の良い点ばかりに注目し、故郷の町をおとしめようとする母の言動に嫌悪感を持ち、これ以上不愉快な思いをする前に母と別れてしまおうと思っている。

ウ　アパートで共に過ごすと、母と故郷に戻りたいという気持ちを抑えきれなくなりそうだと感じ、そうなる前に母と別れてしまおうと思っている。

エ　本当は、もっとずっと一緒にいたいものの、これ以上一緒にいると離れてしまう寂しさに耐えきれなくなってしまうと考え、そうなる前に母と別れてしまおうと思っている。

問６　傍線部④「あのアパートに橙のル・クルーゼがあっても、なんだか滑稽（こっけい）だとも思った」とあるが、なぜか。説明として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　ル・クルーゼの華やかで洗練された雰囲気が、これまでの「私」と母の生活やこれから住むアパートと、あまりにもかけ離れているように感じたから。

イ　ル・クルーゼの鍋では洋風の料理だけしか作ることができず、「私」が上京前に母から教えてもらった和風の家庭料理などを作ることはできないように感じたから。

ウ　ル・クルーゼの非日常的な美しさが、「私」がこれから住む貧相なアパートの様子とは別世界のものであるように思われ、必要ないもののように感じたから。

エ　ル・クルーゼの鍋に付けられた値札に書かれた値段の高さに驚き、「私」や母が気軽に買い求めることができるしろものではないように感じたから。

問７　傍線部⑤「私は母が向かう先とは反対に走り出す」とあるが、このような「私」の行動にはどのような思いが込められているか。このことを説明した次の文の【　】にあてはまる言葉を、三十字以内で答えなさい。

去って行く母の姿をあえて見ないようにすることで、【　　】という思い。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

食物に甘さや辛さがあるように、人間にも甘さと辛さがあるようである。学校の先生が点数をつける時の甘さ辛さは、ある程度まで、その先生の人間の甘さ辛さを反映しているようである。

学生の身になってみると、予期していたより良い点数をつけてくれた先生には何となく好感を持つだけでなく、その課目が好きになり、よく勉強するようになる場合が多いから、どちらかといえば、点の甘い方が教育的効果は大きそうに私には思える。

ところが①こういうふうに思えるということ自身が、[X]人間である証拠であるかも知れない。反対に勉強しなくても、良い点をつけてくれるから、サボってやろうという心掛けの学生も相当ありうるのである。本当に学生のためを思うなら、自分の実力をきびしく反省させる機会を与える方が正しいという考え方もあるであろう。

[A]私の今までの経験では、叱って反省さすことによってよくなる場合よりも、ほめて奨励することによってよくなる場合の方が多いようである。一々の場合によっていろいろ違うにしても、[1]的に見ると、甘すぎる方が辛すぎるよりも結果はよさそうである。

一つの社会を構成する人間の皆が仲好く気持よく暮らして行くためには、各人がそれぞれある程度の甘さを持っている必要があることは確かである。おたがいにあまり批判的すぎる社会は居心地が悪い。

しかしどういう社会にも危険性はある。[B]その中のある一人、またはある一部のグループの勢力が不当に増大し、自分勝手なことばかりするとか、[C]常軌を逸した危険な行動をするような事態に立ちいたる危険性は、どのような社会にも潜んでいる。こういう危険をあらかじめ防ぐためには、各人がある種の辛さを保持していることが必要である。②私人としては甘くても公人としては辛くなければならないというようなことが時々起ってくる。人間の辛さの全然必要でないような社会は天国以外にはないかも知れない。一人一人の人間をとってみても、一生甘さだけで無事に暮らせる人はよほど運の好い人である。そういう場合も、たいてい誰かが代りに辛さを引きうけているのである。

③私ども科学者というものは気むずかしくて、甘さよりも辛さの目立つ人達だと思われがちのようであるが、それも必ずしも当っていない。学者にも甘さと辛さの両面が必要である。非常にすぐれた学者、特に学問の進歩に[2]的な役割を果たした学者には、必ず④ある種の甘さが見出されるのである。

辛さばかりが勝つと、人の仕事に対して批判的になりすぎて、うまくゆけば物になる研究の芽ばえを摘んでしまうおそれがあるばかりでなく、自分自身の中にある可能性までも押えてしまうことがある。学問が飛躍的な進歩をする時には、誰かが今まで思いもかけなかった新しい考えを思いつくとか、新しい物事を見つけだすとかいうことがきっかけとなっている。私どもの持っている既成の概念や知識と相容れないようなものを受けいれる気持を、私どもが持っていなければ、自分の心の中で、あるいは他の人の心の中で成長すべき新しい大切なものが萎んでしまうおそれがある。そこで、甘さというか包容力というかオープンマインデッドネスというか、そういうものが私ども学者の気持、学者の平素からの心構えとしてたいへん大切になってくる。そういうものが、実際すぐれた学者の中には、どこかに見出されるのである。

（湯川秀樹「甘さと辛さ」）

問1　本文中の[A]～[C]にあてはまる言葉として最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　なぜなら　　イ　あるいは　　ウ　だから　　エ　例えば　　オ　しかし

問2　本文中の[1]・[2]にあてはまる言葉として最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　統計　　イ　部分　　ウ　建設　　エ　補助　　オ　論理

問3　本文中の[X]にあてはまる言葉として最も適切なものを本文中より二字で抜き出して答えなさい。

問4　傍線部①「こういうふうに思える」とあるが、筆者はどのようなことを思っているのか。五十字以内で説明しなさい。

問5　傍線部②「私人としては甘くても公人としては辛くなければならないというようなことが時々起ってくる」とあるが、それはなぜだと考えられるか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　社会を構成する人間の大多数は他者と協力する資質を備えているが、そのような資質が欠けている一部の人間に対しては指導的な立場の者が正しい教育をきびしく行う必要があるから。

イ　どのような社会においても何らかのきっかけで社会全体が危機的な状況に陥ることがあり、そのような危機を乗り切るためには個人よりも社会を優先するきびしさが必要になってくるから。

ウ　人間は他人に迷惑をかけない範囲で自由に行動できるように思われているが、そのような個人の自由な行動は社会を維持するために法律によってきびしく制限される必要が生じてくるから。

エ　人間の社会においては社会の安定を壊しかねない者が現れてくる可能性が常にあり、そのような危険性を防ぐためには社会の一員として求められるきびしさを各人が持つ必要があるから。

問６　傍線部③「私ども科学者というものは気むずかしくて、甘さよりも辛さの目立つ人達だと思われがちのようであるが、それも必ずしも当(あた)っていない」とあるが、筆者は「科学者」の「辛さ」の問題点をどのような点にあると考えているか。五十字以内で説明しなさい。

問７　傍線部④「ある種の甘さ」とあるが、筆者が考える「ある種の甘さ」とはどのようなものか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　人間関係を良好に保ちながら、他者に対して配慮ある行動ができる思いやりの精神のようなもの。
イ　何事に対しても強い興味を持ち、新しいものを次々に発見することができる先見の明のようなもの。
ウ　従来の考え方に縛られることなく、未知のものを受け入れることができる心の余裕のようなもの。
エ　自らの失敗にこだわることなく、常に前向きに努力することができる楽観的な考えのようなもの。